

2020年9月27日(日)礼拝説教要約

説教「十字架につけられた主イエス」

(ヨハネ福音書19章16～27節)

私たちは、これまでヨハネ福音書を通してイエス様の十字架への歩みを少しずつ見てきましたが、今日は、いよいよイエス様が十字架につけられる場面、19章16～27節を取り上げ、5つのメッセージを聞いて参りましょう。

まず、19章17節にはこうあります。

「イエスは自ら十字架を背負い、されこうべの場所、ヘブライ語でゴルゴタという所に向かわれた」。

ここには、イエス様が「自ら十字架を背負われた」ことが記されています。十字架はユダヤ人指導者が仕組んだ出来事ですが、イエス様は十字架は神からの使命と受け止め、自ら進んで十字架へと向かわれたのです。

それは罪に苦しみ、罪によって間違った道を歩んでいる私たちを罪から救い出すためです。イエス様は、私たちを罪から救い出すために、自ら進んで積極的に十字架を担われた。ここに主の愛の決断があったと言えます。

次に、18節にはこうあります。

「イエスと一緒にほかの二人をも、イエスを真ん中にして両側に十字架につけた」。

イエス様は二人の犯罪人と共に十字架につけられます。これは、イエス様が罪人である私たちと共に神に裁かれ、共に十字架に架かってくださったことを示しています。イエス様は、最後まで私たちと生死を共にし、一緒に十字架についてくださったのです。ここには、私達と最後まで共に歩んでくださる主の姿があります。

この3本の十字架は、教会を表していると言っていいでしょう。教会とは、イエス様と一緒に十字架につけられた者たちの集まりなのです。

続いて19～22節を見てみましょう。ここには、イエス様の十字架の上には、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」という罪状書きが掲げられたと言います。これは、ユダヤ人の反対を押し切って総督ピラトが掲げたものですが、これは結果として歴史的な事実となったことが記されています。

しかも、この掲示がヘブライ語、ラテン語、ギリシャ語で書かれたことは、イエス様が世界の王であることを示しています。このようにして神のご計画は、人の思いをはるかに超えて、この世に実現していくことを示しています。

4つ目のメッセージは、23～24節にあります。ここにはイエス様が着ていた服が兵士たちによって4つに分けられたこと、イエス様の下着がくじ引きで分けられたことが示されています。

そして、このことは聖書に預言されたことであつたと福音書は記しています。詩編22編19節にこのことが既に預言されていたと言うのです。

このように十字架の出来事、主イエスによる救いの出来事は細部にわたって旧約聖書に記されていることであり、神様の最初からのご計画であつたことが示されているのです。十字架は、偶然の出来事ではなく、預言されていたことであり、神様のご計画であつたことがはっきりと示されているのです。

最後の5つ目のメッセージは、母マリアに対するイエス様の愛は本当に深いということです。主は十字架上から愛する弟子に母マリアをよろしくと伝え、母マリアには愛する弟子を息子として受け入れるように話します。ここには、主の母親に対する深い愛を見

ることができます。

また、主は母マリアに「婦人よ」と呼びかけていますが、これは母親に対し、自分を息子としてではなく、救い主として受け止めることが伝えられています。主は母親にも救いをもたらすことを考えておられたのです。主はすべての人に深い愛の配慮をしながら十字架にお架かりになったのです。

### 2020年9月27日(日)礼拝説教抄(説教本文から)

「そして、最後のメッセージですが、5つ目のことは19:25節から27節にかけて書かれています。ここには、イエス様が十字架につけられた時、そのそばに4人の女性とイエス様が愛された弟子がいたことが書かれています。

しかも、その4人の女性の中には、イエス様の母マリアがいたことが書かれています。これは、他の福音書には書かれていません。しかし、福音記者ヨハネがここにイエス様の母マリアがいたことを書いたということは、何らかの意味があったことを示すためであつたからでしょう。

その意味とは何か。その一つは、母マリアに対するイエス様の深き愛を示すためであつたと言えます。

これまで母マリアは福音書の中に登場していますが、イエス様は母マリアに対して何か冷たいと思われがちです。例えば、母マリアとイエス様の兄弟たちがイエス様を訪ねてきたとき、イエス様は、こうおっしゃいました。「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また、母なのだ」と。このような場面を見て、イエス様は母親に冷たいという人がいます。しかし、果たしてそうでしょうか。

今日の場面では、これから息を引き取ることになる十字架の上から、イエス様が母マリアに対して「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」といって愛する弟子を紹介し、また、愛する弟子に向かって「見なさい、あなたの母です」と言って母マリアを紹介しておられる。それは、自分が息を引き取った後、残された母親を自分の母として世話をすることを愛する弟子にお願いしている、息子としての深い配慮と思いやり、母親に対する深い愛を見ることができます。

さらに、もう一つ大事なことがここに隠されています。それは、イエス様が母マリアに向かって呼びかけられた言葉、「婦人よ」という言葉の中にあります。

イエス様が自分の母親に向かって呼びかけられた「婦人よ」という呼びかけは、何か、よそよそしい言葉のように思われます。母マリアにとっては「お母さん」ではなく、「婦人よ」と呼ばれたことで、大変寂しく、悲しく思ったのではないかと思います。しかし、そのようにイエス様が呼ばれたのには訳がありました。

それは、イエス様が、母マリアに対して、自分をわが子・わが息子として見るのではなく、救い主・キリストとして見ることを願い、求められていたからです。なぜなら、イエス様をわが息子としか見ないのであれば、マリアにとって、救いがないからです。

母マリアも救われなければならない。そのためには、マリアは、イエス様をわが主・わが救い主として仰ぐ必要があるのです。この時、イエス様は、息子としてではなく、救い主としてマリアに向き合っておられる。そのことが「婦人よ」と言う言葉から分かるのです。

それは、マリアにとって辛く厳しいことであつたかもしれません。しかし、それが、母マリアに対するイエス様の真の愛の表れであつたと言えないでしょうか。母マリアの救いは、イエス様を息子と見るのではなく、救い主として仰ぐところにあつたからです。

この後、マリアはどうなったか。使徒言行録を見ますと、マリアは、教会の群れの中に、信徒の一人として入っていることが分かります。つまり、マリアは、イエス様をわが主、わが救い主として仰ぐ人になっていったのです。

イエス様の母マリアがイエス様を救い主として仰ぐにいたったこと、これが、今日の記事が伝える第5のメッセージです。」